

氏 名	みや ぎし ゆき まさ 宮 岸 幸 正
学 位 の 種 類	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 8 号
学位授与の日付	平成 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科・専 攻	工芸科学研究科機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	景観行動から見たシーケンス景観に関する基礎的研究
審 査 委 員	(主査) 教 授 材 野 博 司 教 授 池 田 有 隣 教 授 藤 本 康 雄 教 授 山 口 重 之

論 文 内 容 の 要 旨

都市生活のモビリティが増大する一方で、快適な生活環境への欲求が高まる現代都市において、移動しながら経験するシーケンス景観の快適化計画が強く求められている。そこで本研究は良き景観であると広く認められ、かつ、魅力的シーケンス景観を持つ歩行空間をとりあげ、シーケンス景観と行動との関係を探ることによって快適なシーケンス景観形成のための基礎的資料に供しようというものである。良き景観として、古来より親しまれてきた、歴史的空間で、特に名所として名高い歩行空間を採用している。

これまでのシーケンス景観の研究で人間行動とシーケンス景観との関連における研究はほとんど見られない。また、人間行動を取り扱う場合も、被験者は実験などを含め意図的に設定されていた。本論文では、実際に歩行している人間の自然な行動を現場で観測することを試みている。

論文の内容としては、まずシーケンス景観の概念を明らかにしてから、何が景観行動として客観的に認識できるかを予備調査を続けることによって確定している。対象空間における歩行者の行動観測を行い、視覚に関する行動を、視線方向、回頭性、視覚時間という 3 指標から視覚的行動として抽出し、視覚的行動の中から改めて景観に関する行動を景観行動と定義して、以後の景観行動分析の基礎としている。この景観行動の抽出方法は、極めて独創的であり、シーケンス景観との関係を探る上において有効な指標となっている。

以上の予備的考察をもとに、まず、歩行軸線上のシーケンス景観を、シーケンス環境の基本的構造に沿った景観として、基本構造シーケンス景観と定義し、調査に基づき分析を行っている。

分析の結果から、①景観行動と空間の開放度とが強い相関関係を持つ景観構造（銀閣寺など）、②空間の開放度、インパクト度との両方が景観行動と強い関係を持つ景観構造（柱離宮など）、③インパクト度の強弱が主に相関関係を持つ景観構造（西芳寺など）の 3 つのシーケンス環境に分類できることを明らかにしている。次に、景観行動の中でも撮影行動に焦点を絞り、撮影行動と基本構造

シーケンス景観との関係についても明確にしている。また、景観行動と実際の景観イメージとの関係については、ヒアリング調査によって、景観行動量の多い地点が、イメージ頻度の高い地点とある程度対応し、その中でも、撮影を伴うような滞留行動が、景観イメージ形成と強く相関することを明らかにしている。

さらに、行動調査から得た歩行者の平均的視線から作成したシーケンス景観を、改めて行動シーケンス景観としてとらえ直し、景観行動と空間の開放度、インパクト度との関係は、行動シーケンス景観の方が、基本構造シーケンス景観以上に強い関係を持つことを証明している。

最後に、基本構造シーケンス景観と行動シーケンス景観との関係について論じている。基本構造シーケンス景観で、開放度もインパクト度も余りにも極端に高くなり過ぎると低い方へ、低くなり過ぎると高い方へと行動が修正され、行動シーケンス景観においては、中間的な幅の値をとる、適度な変化が求められていることを示している。次に、基本構造シーケンス景観での変化の少ない区間では、変化性を求めて行動シーケンス景観の値が特に変化していることを明らかにしている。また基本構造シーケンス景観は、開放度、インパクト度の両方から見て穏やか気味の変化であるのに対して、行動シーケンス景観は変化性が大きいことも明らかにしている。

さらに、両者と景観行動との関わりでは、歩行者は、基本構造シーケンス景観をベースとしながら、行動シーケンス景観に対応しており、基本構造シーケンス景観と行動シーケンス景観の相互補完的な傾向をひき出している。

論文審査結果の要旨

本論文が、実態空間と自然状態の人間行動との関わりを通して、景観のシステムを探る上において、有効な手法をいくつか提出しているとともに、極めて独創的な研究であると全審査員が認めた。

有効な手法として、まず、多様な人間の歩行行動の中から、視覚的行動、特にその中でも景観行動を、何回もの調査を積み重ねることによって、抽出して行った点が大きな特徴である。また、それを傍証するものとして、明確に観察し得る景観撮影行動をとり上げ、それが景観行動に対応していることを証明している。

次に、歩行者の視野に代替えさせた写真の画像において、景観行動と対応する幾つかの指標を模索しながら、①開放度、②インパクト度、というシーケンス景観を分析する上において、極めて有効な指標を提出した点は、特記されるものである。

これらの指標を使って、景観のシーケンスを景観行動との関係でとらえ、かつ、継起性に主眼を置いて、分析している手法が、景観のシーケンス研究の発展に大きく寄与すると考えられる。既往の研究において、シーケンス景観に近い研究があっても、歩行者の視野の連続の総体としてとらえる認識方法は特に少ない。そして、かつ、視野の連続として分析する場合も、直前地点と直後地点との変化を主として把握する継起性に主眼を置いたものは、既往の研究では全くなく、この点が特に独創的である。

また、シーケンス景観を2つの側面でもとらえている点が特徴である。すなわち、シーケンス景

観が、歩行者の自然な状態での視野に関わるべきものであることは、先記したが、既往の研究では、現実の歩行者の行動から得られた視野というよりも、立面的視野画像もしくは歩行軸線上のパースペクティブな視野画像に限られていた。これは、言いかえれば、図面や模型があれば、実験的にデータが入手可能な手法であるが、そこで得られた景観画像は、歩行者の実際の行動から得られた景観とは、大きな差異があると推測し得る。そこで、まず、ある程度の軸線（歩行路）の変化性を持つ実在の対象空間で、歩行軸線上の視野の連続を基本構造シーケンス景観として把握し、実際の景観行動から得られた視野の画像の連続として、行動シーケンス景観を抽出し、その両者の関係を分析している。そして、基本構造シーケンス景観のみでは、把握できないシーケンス景観のシステムを、行動シーケンス景観を導入することによって、両者の関わりから解明するとともに、両者と景観行動との関係を明らかにしている点が、極めて独創的である。

また、理論の展開も適切であると認められ、調査の方法、分析のプロセスも無理がないと考えられる。さらに、結論も明確であって、都市デザイン上有効な結論が得られている。

最後に、学位論文の基礎となった学術論文は一定量以上あると確認でき、課程修了による博士の学位授与に関する内規ならびに同内規の運用方針を満たしていることを付記する。